

---

# IS ー闇夜を翔る黒騎士ー

ポテチブロックリー味

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS―闇夜を翔る黒騎士―

### 【Nコード】

N7638S

### 【作者名】

ポテチブロッコリー味

### 【あらすじ】

世界で初めてISを動かした男、織斑一夏しかし彼より先にISを動かした男がいた。

しかもその男は鬼才、神童と呼ばれた一夏の兄、織斑秋夜だった!?

これはそんな一夏の兄、織斑秋夜と仲間達の物語りである。

まあ、前置きはここまでにして楽しい作品が出来たらと思いますー！

## プロローグ(前書き)

それでは「話目をどうぞ」

(・・)ノ

## プロローグ

ゴオオオツ!!

燃え盛る大地、紅く染まる夜空

ギイン!! ガギイン!!

そんな中に鳴り響く戦闘音、その戦闘をしている人物は片方は、二十歳ぐらいの女性で紫色の装甲を身に纏い、もう片方はまだ13、14歳ぐらいの少年で漆黒の装甲を身に纏い宙に浮いている。

「チイツ!! 死ぬエエエ《キュイン!! キュイン!!》」

紫色の装甲を身に纏った女性が殺意のこもった声を出しながら右手に持ったビームライフルで漆黒の装甲を身に纏った少年に向け撃ちだした。

「ハアアアア!! 《バシュツ!! ギンツ!!》」

しかし少年は右腕に装備されて盾と剣が融合したような武器で切り裂いたり、左腕に装備されている大型の盾で防ぎながら女性に一気に近づいていき、

「何ツ!!? 《ガギイン!! ギイン!!》ガアツ!!」

その剣で女性の装甲を切り裂いた。

少年は墜ちてく女性に目もくれず身に纏っている装甲《IS》のプライベートチャンネルを開きある人物に連絡をした。

「姉貴！！　一夏と春陽は見つかったか！？」

「秋夜か！！　ああ今見つけて保護した所だ合流してすぐに撤退するぞ」

そう言った少年、織斑秋夜はすぐに返事をし、自分が姉と言った人物、織斑千冬と合流するべく急いで移動した。

すぐに合流することは出来たが今二人の目の前にはそれぞれのISを身に纏った女性三人が二人を殺意のこもった目で睨みつけていた。

「・・・姉貴、ここは俺がどうにかするから二人を連れて逃げる！！」

「なッ！？　お前は本気で言っているのか！？」

「ああ、本気だ俺がこいつらの足止めをするからすぐに逃げる！！　どうせ、ISを動かせることがバレた俺と一緒にいくと情報をくれたドイツ軍や世界の各国が何言ってくるかわからない、だから俺はこの戦闘が終わったら雲隠れする。」

「クッ！！　だがッ忘れるなよお前は私たちの家族だ！！　何時でもいいから必ず帰ってこい。」

「ありがとう姉貴必ず帰って来るから、後一夏と春陽のことは頼んだよ姉貴。」

そう言い実の弟の一夏と血は繋がってはいないが本当の妹のように

可愛がった春陽の頭を撫でた。

「頼まれるまでのことじゃない二人は私が必ず守る。」

満足そうに頷き先程話している時に攻撃される前に放ったビットの攻撃の嵐を避けている三人に目を向ける。

「それじゃあ、行ってくる」

「ああ、行ってこい」

この後、彼織斑秋夜は行方知れずになった。

## ブログ（後書き）

ああ、やってしまった友人に言われたからついついテンション高くなつてやってしまった。  
だが、後悔はない！！

## 第一話（前書き）

二話目更新〜完了

〇（）^（）^（）〇

## 第一話

「ふあああゝ、あゝ眠い」

そう言い頭をポリポリとかきながらIS学園に向かって歩くのはこの話しのオリ主こと織斑秋夜である。

彼の見た目は10人10人が振り返るほど整っており、体は鍛えられているが筋肉質ではない。

服装はIS学園の制服を改造して羽織っており下には黒い服着ており【マジ恋の川神百代の制服姿の男版見たい】、首には漆黒の翼を模したネックレスをしている。

そんな服装の秋夜が言っているとすぐ近くから少し非難の聲がかけられる。

「秋くん」

「ん？何だリアナ？」

「そのお、えゝともう少しちゃんとした方がいいじゃないのかな？」

そう言つて上目遣いで右側から見ってくるのはリアナ・オストリウス、蒼銀色の髪の毛を背中辺りまで伸ばし、肌は雪のように白く、顔は人形みたいに小さく精巧。服装はIS学園の制服姿で誰か見ても美少女と言っだろう。

「アツハツハツハ！！」

無駄だよりアナ、秋夜のこのマイペースは直らないからねえ！！」

そう言ったのはこれまた綺麗と言って良いほど整った顔、長く膝辺りまで伸ばした金色の髪の毛をポニーテールにし、IS学園の制服姿の美少女、アスカ・レムレスは秋夜の腕に抱きつきながらまた発言をする。

「ん〜、それは別に良いとしてIS学園にいたら案内人がいるって聞いたんだけどいないね〜」

そう、彼らは話している内にIS学園についていたのだ。

「その内来るだろう」

秋夜はそう言い彼の言う通り1、2分まつと彼の言う通り誰かがこちらに向かつて歩いて来る。

「ん？来たみたいだぞ」

そう言うと二人は同時に同じ方向を見るとこちらに向かつて歩いて来る女性がいた。

黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い吊り目。

それは秋夜がよく知っている人物、実の姉の織斑千冬だった。

「……………」

無言で圧力をかけながらこちらに近づいて来る千冬にアスカやリアナは無意識に一步退いていた。

そんな中でも自分のペースを保ってる彼はその異常な空気に気づいていないのかそれとも気づいていてそうしているのかはわからない

が秋夜は嬉しそうな態度で千冬に話しかけた。

「久しぶりだな姉貴!!」

束の姐さんに姉貴がIS学園で教師をやっているって聞いたときはまさかあゝとは思っていたけど本当にやっていたんだな!!」

そう言いながら未だにしゃべっている秋夜に無言で近づく千冬はそんな秋夜に向かって《パンツ!!》「グハアツ!!」持っていた出席簿で秋夜の頭に向かって振り落とした。

「フオオオオツ!!」

奇声をあげながら地面でゴロゴロ転がってる秋夜を無視して千冬はリアナとアスカに近づき二人に話しかけた。

「君らが束が言っていた二人だな? 私は織斑千冬、君達が所属するクラスの担任をしている」

そう言う千冬に対して二人は背筋を伸ばしながら返事を言う。

「はッ、はいッ!! 今日からIS学園に入学することになったアスカ・レムレスです!!」

「おッ、同じく今日からIS学園に入学することになったリアナ・オストリウスです!!」

返事をする二人見て満足そうに頷き視線を未だに地面で転がっている秋夜に向けて言い放った。

「何時まで遊んでるさっさと立て馬鹿者が」

千冬に言われ秋夜は地面を転がるのを止め頭をさすりながら立ち千冬を睨みつけながら秋夜は千冬に文句を言う。

「久しぶりに会ったのにいきなり何すんだよ！！」

「音信不通で行方もまったくわからなかった愚弟が何を言うか。心配することちの身になってみる」

「ウツ！！それは悪かったって思ってるけどさあ」

「それと一つお前に聞きたいことがある」

「ん？何答えられることなら教えるけど」

「2年前にニュースになった違法研究所の襲撃事件に出て来た《黒騎士》はお前か？」

「・・・・・・・・・・」

千冬の言う違法研究所の襲撃事件、通称《黒騎士事件》は漆黒のISが違法研究所を襲撃し研究所を破壊しながら研究員を一人も殺さずに捕縛したと言う事件で2年前に世界中で問題になった事件である。

黒騎士が現れた当初は世界中に467機しかないコアの内、数個保有しており絶賛手配中の篠ノ之束に関係があるのではないかと思われる世界中が黒騎士を捕縛しようとしたが襲撃事件後まったく姿を現さないので黒騎士捕縛はすぐに断念された。

千冬に言われ秋夜はしばらく無言を貫いていたが言いづらそうにその口を開いた。

「ああ、そうだよ。黒騎士は確かに俺だよ」

そう言った瞬間に千冬はその出席簿で《パァン！！》「ウゴアッ！  
！」また秋夜の頭を叩いた。

「まあこれぐらいで許してはやるがあまり心配をさせるな」

「ああ、ゴメン姉貴、だけどあのことで俺は後悔はしてないからな」

そう言い後ろに立っているアスカとリアナに視線を向ける。

その視線を向けられた二人は無言で秋夜に近づきそれぞれ秋夜の腕に抱きついて微笑んだ。

それを見た千冬は彼女にしては珍しく優しい視線を3人に向けていた。

「さて、そろそろ行くぞ。」

ああ後私のことは織斑先生と言えわかったな？」

『はい！！織斑先生！！』

あの後三人は千冬の後ろについていき今はIS学園内の1年1組の前に来ており、千冬に「呼ぶまでここで待ってる」と言われ今は教室の前で待っているが《パァン》これで3回目になるが秋夜は誰が

叩かれているのかおおよそ予想はできていた。

「一夏は何やってんだか……」

叩かれているのが一夏だと予想できた時は笑っていたが流石に3回目にもなると呆れてくる。

『これでSHRは終わりだ……と言いたい所だがまだ自己紹介をしてない者達がいてな、おい入れ』

ガラガラッ……

突然の3人の美男子、美少女の登場に驚いて声にならず静まり返ってる教室。

「さて、さつさと自己紹介をしる三人とも」

千冬にそう言われ自己紹介を初める三人

「はい！！それじゃあ初めは私がやります！！

初めましてアスカ・レムレスです！

趣味は特に無いけど特技は家事全般です！！

皆さん気軽に声をかけてくださいね」

元気な声をあげながら自己紹介を行うアスカ

「そッそれでは次はリアツじゃなくて私の番ですねッ！！

はッ初めましてリアナ・オストリウスです。

とッ特技は機械関係の物なら色々できます。

その、よッよろしくお願いしましゅッ！！」

そう噛みながら言ったりアナは顔を赤らめて秋夜の後ろに隠れてしまった。

「最後は俺だな。

初めまして俺は織斑秋夜、趣味は特に無いが特技はアスカと同じで色々ある。

一応言っておくが俺は男だ。

年は17でみんなより年上だが敬語なんて使わずに気軽に話しかけてくれ」

「兄貴!？」 「兄さん!？」 「秋夜さん!？」

一夏、春陽、箒が驚いた声をあげると同時に女子達の黄色い声が響いた。

## 第一話（後書き）

携帯で投稿してるから連日更新はこれからは難しいと思います。

## オリキャラ設定(前書き)

これにはネタバレがあります!!

## オリキャラ設定

オリジナルキャラの設定です（ ・ ・ ） /

名前、織斑秋夜おりむらしゆみや

身長、180、6？

体重、69、3？

性別、男

趣味、色々、あえて言うなら一夏をからかうこと  
好きな

物、IS、刀

人、アスカ、リアナ、春陽、箒、千冬、一夏、束、友人達  
食べ物、大体何でも食べれる

こと、ISでの戦闘

嫌いな

物、泣き顔（特に女性の）

人、理由もなく人を傷つける者、それを見て笑っている者  
食べ物、特になし

こと、イジメ

容姿、上の上

瞳、漆黒

髪、漆黒（長さは膝下まであり、昔春陽から貰った紅色の髪留めを  
使って頂うなじで束ねている）

体付き、長身で体は鍛え上げられてある。男性が見たら憧れるほど  
性格、基本的には優しく、友人には平等に接する。時々ボケて一夏

達につっこまれる。戦闘になると冷静になり正しい判断が出来るようになる。

生い立ち

千冬の弟、一夏の兄、春陽の義兄。小学生の頃からその天才的な才能を発揮し束のIS製作を手伝っていたほど。イジメが嫌いであつあげなどをしていた不良達を持っていた黒塗りの長い木刀を使つてボコボコにした姿から『黒剣帝』と呼ばれ、不良達から恐れられた。箒とは仲が良くとても懐かれていた。鈴とも顔見知り。中学生の時におきた『黒騎士事件』により行方知れずになっていたが偶然束と再会し一緒に行動していた。

名前、アスカ・レムレス

身長、165,5cm

体重、黒く塗りつぶしてある。

性別、女

趣味、色々、やりたいと思つた物なら何でもする

好きな

物、秋夜から貰つたネックレス

人、秋夜、友人達

食べ物、たまに作つてくれる秋夜の料理

こと、面白いこと、楽しいこと

嫌いな

物、特になし

人、秋夜の敵、秋夜を傷つける者、研究員（少しトラウマになっているから嫌いと言つより苦手）

食べ物、苦い物

こと、人体実験

容姿、上の上

瞳、朱色

髪、綺麗な金色の髪を膝下まで伸ばしており、秋夜から貰った瞳と同じ朱色の髪留めを使って綺麗にポニーテールに纏めてある。

体付き

もう一言しか言えないほどナイスバディー、出るところは出ており締まる所は締まってある。女性が恨めしそうな目でよくアス力を見ている。

性格、元気で明るく俗に言うムードメーカーである。秋夜のこと大好きでよく抱きついている所をよく目撃される。

生い立ち

孤児。12歳の時に孤児院が襲撃され孤児院の子供全員が誘拐される。IS適性が高いと言う理由で最強のIS操縦者をつくる計画、AS計画（《アルティメット》《ソルジャー》2つの頭文字から取った。意味は究極の兵士）の被験体として人体実験を行われ成功した2人の内の1人であり、結果アス力は人外並の身体能力と天才的な頭脳を手に入れてしまった。この実験の成功後、研究員達はアス力に薬を使い命令通り動かせるようにしようとしたが秋夜の襲撃により失敗。

アス力はこの時秋夜に助けられ一目惚れし秋夜に付いて行くことにする。

名前、リアナ・オストリウス

身長、150、2cm

体重、ここだけデータが全て消されてる。

性別、女

趣味、本、機会いじり

好きな

物、秋夜から貰った腕輪

人、秋夜、友人達

食べ物、秋夜がたまに作ってくれるスイーツ

こと、静かな所で本を読むこと

嫌いな

物、特になし

人、秋夜の敵、秋夜を傷つける者、研究員（アスカと同じくトラウマになっており嫌いと言うより苦手）

食べ物、辛いもの

こと、人体実験

容姿、上の上

瞳、綺麗な銀色

髪、綺麗な蒼銀色の髪が背中辺りまで伸びており秋夜から貰った瞳と同じ蒼銀色の髪留めで一部の髪を頭の後ろで縛ってある。

体付き

小さいのに出るところは出ておりいわゆる口リ巨乳である。

性格、初対面の人にはオロオロしており拳動不審であるが仲良くなつた人には拳動不審さがなくなり一人称が「私」から「リアナ」になる。アスカと同じくリアナも秋夜のことが好きでよく秋夜の背中にくつつつき、ぶら下がっているのがよく目撃されている。

生い立ち

孤児。アスカと同じ孤児院にいたが襲撃、誘拐されアスカと同じく人体実験をされる。その結果アスカほどではないが高い身体能力とアスカ以上の頭脳を手に入れてた。成功した2人の1人でアスカと同じ部屋に閉じ込められていたが秋夜に助けられアスカと同じく一

目惚れし秋夜に付いて行くことにした。

名前、織斑おりむら春陽はるひ身長、164 / 1cm

体重、綺麗に刻み込まれている。

趣味、剣道、料理

性別、女

好きな

物、昔、秋夜から貰った刀《春月》

人、秋夜、家族、友人達

食べ物、秋夜がたまに作るジュース

こと、好敵手である筈との剣道の試合

嫌いな

物、虫

人、秋夜を傷つける者

食べ物、大体何でも食べれる

こと、イジメ

容姿、上の上

瞳、黒

髪、綺麗な黒髪を膝下まで伸ばしており、昔秋夜にあげたお揃いの髪留めを使って髪を左側でサイドテールにしている。体付き、アスカやリアナよりは胸は小さく（それでも平均よりは大きく上回っている）、バランスがとれた体型と言える。

性格、真面目で優しく、頼まれたらあまりいいえとは言えないお人好しで面倒見が良い。義兄の秋夜が大好きでよくそばに寄り添って

いる所をよく目撃されている。

生い立ち

五歳の頃まで虐待を受けており偶然倒れている春陽を秋夜が見つけた家に連れていき治療をした後虐待のことを警察に話し、親を逮捕した後秋夜が千冬に養子のことを提案しそのまま養子になる。

まあ、オリキャラの設定はこれくらいです!!

**オリキャラ設定(後書き)**

今日からGWだ

〇 (^ ^ ) 〇

## 第二話（前書き）

あゝ、勉強しなければ

（\*、、）＝

勉強の休憩中に投稿！！

（、・・・、）キリッ

## 第二話

秋夜達は教室に入り自己紹介が終わった瞬間に響いた女子の黄色い声に耳を押さえながら驚いてる。

『きゃああああーッ!』

「男子! 2人目の男子!」

「美形! カッコイ系の!」

「神様! 私をこのクラスにしてくれてありがとう!」

「ああ! その顔でお前は俺が守るって言われたい!」

最後のは俺が惚れたら言ってもいいぞ何て秋夜が思っているとか冬が面倒くさそうにぼやく。

「あゝ、騒ぐな。静かにしろ」

千冬がそう言うのと騒ぎが少し落ち着きをとり戻す。女子が落ち着きをとり戻した瞬間に秋夜一夏と春陽にはなしかける。

「よお! 一夏、春陽久しぶりだな! 随分と大きくなったな」

そんな秋夜に対して一夏と春陽は

「久しぶりじゃねーよ兄貴! 今までどこで何してたんだよ!」

「そうです兄さん! 一夏の言う通り今までどこで何してたんですか

!？」

そんな2人に対して秋夜は

「何を言う一夏、春陽！マイペース、フリーダムこそが俺、織斑秋夜だぞ！行方知れずになって何をやってた？はッ、そんなの決まっているじゃないか。自由気ままにやってたに決まっているじゃないか！」

そこまで秋夜達は話していたが千冬に遮れる。

「再会の途中で悪いが授業だ。秋夜。お前の席は織斑のの後ろだ。レムレスの席は秋夜の右側、オストリウスの席は秋夜の左側だ、さつさと席につけ」

千冬にそう言われ席につく3人。

「さあ、これでSHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

なんとという暴君なんて秋夜や一夏が思っていると一時間目の授業が始まった。

一時間目の授業が終わり今は休み時間。秋夜達は今久しぶりに再会

した一夏と春陽と話していた。

「なあ兄貴この際どこで何やっていたかは別にいいとして、1つ聞きたいことがあるんだけど」

「あつ、そうです兄さん、私も聞きたいことがあるんです」

そう言った2人は声を揃えて秋夜に聞いた。

『その2人とはどうゆう関係?』

そう聞いた2人。一夏は素直な疑問、春陽は少し怒気のこもった声で聞いた。それに対して秋夜は

「ん〜?俺の……嫁?」

ピキッ!!

秋夜がそう言った瞬間空気が凍りついた。

「にッ、兄さん!現実ではハーレムなんてつくれないですよ!」

「いやだつてさあ〜、それ以外に表現の仕方がわからないからな〜。2人はどう思うよ?」

秋夜に聞かれた2人はそう言った秋夜に対して

「その、まッ間違つてはいないとは思っけど、そんなハツキリ言われると少し恥ずかしいよ〜/~/」

そう言ったりアナは秋夜の服の裾をキュッと掴んで顔を赤らめなが

ら潤んだ瞳をし上目遣いで秋夜を見つめていた。

「そッそんなハッキリ言わないでよ！はッ恥ずかしいんだから／＼」

アスカは秋夜の言葉に嬉しそくに顔を赤らめながらモジモジしていた。それ見た春陽は絶句し急いで篝の方に顔を向けアイコンタクトをした。

（マズいですよ篝さん！兄さんが言ったこと冗談じゃなくて本気ですよ！）

（おッ落ち着くんだ春陽！まだ負けたわけじゃない！まだどうにかなる範囲だ！）

アイコンタクトで話しあったあと篝が秋夜に近づき話しかけた。

「……ちょっといいか」

「ん？」

秋夜は振り返り篝の顔見た瞬間驚いた顔に変わる。

「お前篝か？見ない間に随分綺麗になっ たな」

秋夜にそう言われた篝はポフンツ！と音を出し「きッ綺麗／＼／＼」と呟きながら顔を赤らめて俯いてしまった。

（にッ兄さんはいつもワザとやってるんですか！？何でそんな言葉を素直に言えるんですかー！？）

そんなことを思いながら秋夜を睨みつけていた春陽だが自分が睨まれていること気付いた秋夜が春陽に話しかけた。

「どうしたんだよ春陽？そんな顔して綺麗な顔が台無しだぞ？」

そんなことを言われ春陽もボフンツ！と音を出して「きッ綺麗ノノ」と呟きながら俯いてしまった。秋夜の隣ではそうだそうだと言わんばかりの顔で頷いてる一夏が座ってる。女子一同は心の中で『この兄弟は……』何て考えていた。

そんなことをやっていたら二時間目が始まりみなそれぞれの席に付き授業を受けている。

そんな中教科書をパラパラ見たり、キヨロキヨロしながら周りを見ている一夏に気付いた秋夜が小声で一夏に話しかけていた。

「おい、一夏。さっきからお前は何してんだよ」

「い、いや兄貴。授業がまったく解らなくて」

「よし、そうゆう時は……」

「あッ兄貴教えられるのか!？」

「先生に聞け」

イスの上で器用に転けた一夏に気付いた山田先生が一夏に聞いてきた。

「織斑くん、何かわからない所がありますか？」

「あ、えつと……」

「わからない所があったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

え、えつと……。織斑くん以外で、今の段階がわからない人はいますか？」

シーン……。一夏がこの空気に耐えられず実の兄を見て見るとそこには必至に笑いをこらえている兄の姿が。

(まさか兄貴こういう状況になるってわかってたな!?)

そんなことを一夏が思っていると教室の端で控えていた千冬が訊いてくる。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

そう言ったあと千冬は秋夜の方に顔を向け秋夜に言った。

「秋夜。この後お前が一夏に勉強を教えてやれ」

千冬はそう言ったが返事がないので秋夜をもう一度見てみると笑いを未だにこらえている秋夜がいた。

「・・・・・・・・・・」

千冬はそんな秋夜に無言で近づき《パンツ！》出席簿で頭を叩いた。  
アホばっかである。

第二話（後書き）

ヤバい腹痛い

（ ; ）！！

第三話（前書き）

あゝ、腹痛い

（ ^ ^ ; ）

### 第三話

二時間目の授業も終わり今は休み時間。秋夜はみんなと喋っていた。

『アツハツハツハツハツハツハ！』

大笑いしながら机をバンバン叩いている秋夜とアスカ。

【この2人が何故ここまで面白がっているのかは、前話を見ればわかります】

「そこまで笑わなくてもいいだろ！！本当に解らなかつたんだから！！！」

一夏がそう言いようやく笑いをおさめる2人。

「しっかしお前バカ正直に全部わかりませんって……クククッ」

「だから笑うなー！！」

そうみんな楽しく話している時にいきなり声をかけられた。

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

「へ？」

話しかけてきた相手は、白人特有の透き通ったブルーの瞳、わずかにロールがかかった金髪はいかにも高貴なオーラを出している。彼

女の雰囲気は『いかにも』今の女子という感じである。

「なんか用か？」

「どついつ用件だ？」

秋夜と一夏のその態度に彼女は

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「そう言われても、俺、君のこと全く知らないしな」

「悪いな。俺も君が誰か知らないし」

秋夜と一夏はそう答えたが、彼女はその答えが気に入らなかつたらしく吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試出席このわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

そんな彼女に対して一夏が質問する。

「代表候補生って、何？」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。そんな一夏に対して、春陽、箒、リアナは呆れ、秋夜とアスカは爆笑

している。

「アツハツハツハツハツハツハ！」

お前それ本気で言ってるのか！？代表候補生って言葉通りの意味だぜお前」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

2人の言葉に一夏は

「おう。知らん」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

全員が呆れた目で一夏を見ていた。あの秋夜でさえ呆れた目で一夏を見ている。そのみんなの態度に頭にはてなマークが出てる一夏。そんな一夏に先ほど秋夜の後ろでオロオロしていたが秋夜の紹介で打ち解けて仲良くなったリアナが優しく説明してくれる。

「一夏くん。代表候補生って言うのは国家代表IS操縦者の、その候補生のことを言うだよ」

「へえ、そうなのか」

「そう！エリートなのですわ」

そう言いビシッと一夏と秋夜に人差し指を向けて言う。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・・・・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理

解していただける？」

セシリアの言葉に秋夜と一夏は一瞬目を見合わせ同時に言った。

『そうか。それはラッキーだ』

「……馬鹿にしていますの？」

お前が幸運だつて言ったんだろ？何て2人は考えているとまたセシリアが言ってくる。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。少くらしい知的さを感じさせるかと思っただけだ」

そう言ったセシリアは一夏を見たあと秋夜を見て言った。

「どうせその男もこちらの男と同程度でしょう。期待はずれですわね」

「俺達に何か期待されても困るんだが」

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しくしてあげますわよ。ISのことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「いや君だけじゃなくて、俺も倒したぞ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官。」

「は………?」

秋夜と一夏が言った瞬間相当ショックだったのか、セシリアは目を驚きに見開いている。

「わ、わたくしだけと聞きましたが?」

「女子ではってオチじゃないのか?」

「つ、つまり、わたくしだけではないと」

「知らんがな。俺達じゃなくて姉……織斑先生にでも聞けばいいだろ」

「あなた!あなた達も教官を倒したって言うの?」

「いや、そんな焦るなよ。落ち着け、な?」

「こ、これが落ち着いていられ」

キーンコーンカーンコーン。

「ッ………!またあとで来ますわ!」

一、二時間目とは違って山田先生ではなく千冬が教壇に立っている。

「ああ、そう言えば再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬が言う。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。まあ、クラス長だな。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれでいいと思います！」

「俺も一夏でいいと思います！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやりたくない！後、兄貴何ちゃっかり俺のこと推薦してんだよ！」

「織斑。席に着け、自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「くッ、それなら俺は兄貴を推薦します！」

「おいッ！何俺のこと巻き込んでだよお前は！」

「それでは他にいないか？いないならこの2人のどちらかで決定だが」

「こうなったらとことん巻き込んでやるぜ兄貴！」

「くッ、一夏貴様ー！」

秋夜と一夏ギヤアギヤア言いあっていたが突然甲高い声が遮った。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

声をあげバンツと机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった。

「実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛でー」

カチン。

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「いや、一夏イギリスが世界一まずい料理なのは多分もう変わらな  
いと思うぞ」

「なッ……！？」

「おつとつい本音がでてしまった。」

「あつ、あつ、あなた達ねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に行つてきたのは君だろ？」

「決闘ですわ！」

「決闘？いいぞ、受けてたつ……一夏が」

がたたつ！女子数名が器用にこけた。

「おいつ、兄貴！俺を巻き込むなよ」

「いやいや、どうせお前もやるんだから変わらんだろ？」

「え？そうなのか？俺も決闘する流れ？」

一夏が1人で唸り始めたので秋夜はセシリアに顔を向け何時もの優しい声ではなく冷徹な戦士の声で言い放った。

「オルコット。手加減はいらんからな。俺は手加減されるのが大嫌いなんでね」

「ツ……！！」

その声にも何も答えることが出来なかった。ぱんつと手を打って千冬が話を締める。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。初めに秋夜とオルコットが試合をし、勝者が織斑と試合をやることにする。3人とも、それぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

千冬にそう言われ3人は席につき授業をするために教科書を開いた。

### 第三話（後書き）

このまま原作にそっていきたいと思います。

（・・）  
（・・）  
／

#### 第四話（前書き）

どうも今、金欠状態の作者です）・（）／

金がないからどこにもいけず家でゴロゴロしながら執筆中

それでは新しく投稿

／）・（）／

## 第四話

「うっ……」

放課後、一夏は机の上でぐったりとうなだれていた。

「い、意味がわからん……。なんでこんなややこしいんだ……。？」

「まあ、俺もISのことを覚える時はしんどかったからな」

「兄貴でもしんどいなら俺はどうしたらいいんだよ」

そう言い机に突っ伏してしまった一夏に秋夜は苦笑し休憩だと言って教科書を閉じた。秋夜は現在、千冬に言われ一夏にISのことを教えているが一夏は全くわからなかったようだ。

「ああ、織斑くん、秋夜くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

「どうかしたんすか？山田先生？」

秋夜と一夏は呼ばれた方向に顔を向けると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

秋夜と一夏は頭にはてなマークをだし、首を傾げながら山田先生に聞いた。

「俺の部屋、決まってるじゃないんじゃないですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「俺もそう聞いたと思うんですけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです」

「部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「おつ、なら俺も家に帰るぞ。俺の刀を取りに行きたいからな」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え。まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「すげえ大雑把、なんて秋夜と一夏が思っていると千冬は一夏の次に秋夜に聞いてきた。」

「秋夜。お前の着替えは束から送られてきたからな」

「わかりました」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂で取ってください。あと織斑くん達は大浴場」

が使えないので各部屋にシャワーがありますからそれを使ってください。じゃあ私達は会議があるので、これで」

千冬と山田先生が教室から出て行くを見送ったあと、一夏はふと思いだしたように秋夜に聞く。

「そう言えば兄貴。決闘の時のISSってどうすんだ？」

「ん？お前のは知らんが俺は専用機があるから問題ない」

「はッ？兄貴専用機持ってんのか！？」

「おお、持ってるぞ。見るか？」

秋夜はそう言い右手の人差し指につけていた黒い指輪を一夏に見せた。

秋夜と一夏が話しているころ、セシリアはイライラしながら廊下を歩いていた。

（なんですの、あの男は！？）

セシリアが言う男のことは何を隠そう先ほどセシリアに手加減はいらないと言った秋夜である。

(手加減などいらないうすって!? 男なのに何故あそこまで自信があるのか全くわかりませんわ!・・・まあ、いいですわ。決闘の時にその自信を粉々に砕いてさしあげますわ)

頭の中で何回も思った疑問だが流石に数時間たって冷静になったセシリアはそんなことを考えながら廊下を歩いていった。

「・・・はあ」

入学式から1日たち、今は朝の8時。朝食の時間である。秋夜達は今現在、朝食をとっているが秋夜は悟りを開いたような顔をし、一夏は疲れたような顔をしている。

その理由は・・・

「はい、秋夜あ〜ん」

これである。秋夜と一夏は朝食を食べに食堂に来たのだが空いている席がなく探していると丁度、朝食を食べ終わったアスカとまだ朝食を食べてるリアナ、春陽、箸を見つけその席に座らせてもらったが

アスカが秋夜が持ってきた朝食の和食セットを奪い、今の状況である。秋夜は返してもらおうとしたが

「なあ、アスカ返してくれないか」

「ダメ」

「頼むから、アスカ」

「ダメ」

「ア」

「ダメ」

「・・・・・・・・・・」

このやりとりがしばらく続いた後、秋夜は悟りを開いたような顔になり諦めたわけである。何故一夏も疲れているのかと言うと昨日より女子の視線が凄まじく、ものすごく注目を浴びているからである。一夏は一瞬秋夜を見たが秋夜は目で「考えるな。感じろ」と目で訴えきたのである。一夏は自分よりキツイ状況なのにそんなことを言う秋夜に不覚にも感動してしまった。心の中で「頑張れ兄貴！」と思いつつ朝食を食べ始める一夏。一夏がそう思い食事を再開し始めたころ秋夜は新しい窮地に立たされていた。

「ん」

「・・・・・・・・・・」

アスカが味噌汁を口に含み、秋夜の方に唇を向けていた。どうしたものかと秋夜が考えていると先ほどから凄まじい目でこちらを睨んでいた春陽と篤が一事食事を中断し、アスカに近づき頭を《バシンツ》ひっぱたいた。ひっぱかれた勢いでゴクンツと口に含んでいた味噌汁を飲んでしまい抗議の声をあげる。

「いったくいなもう！何すんのよ！」

「アスカさん！今のは調子にのりすぎです」

「そうだぞ貴様！春陽の言うとおりだ！いい加減にしろ！」

「え、でも秋夜は嫌じゃないよね」

そう訊かれた秋夜は、アスカ達が言い争いを始めたころ急いで朝食を食べていた。

「で、どうなの秋夜」

朝食を取り上げ秋夜に聞いてくるアスカ。

「モグモグ……ゴクンツ！ん？確かに嫌じゃないがせめて時と場所だけはわきまえてほしいな」

「ほらね」

勝ち誇った顔をするアスカだが春陽と篤はそれを無視し秋夜に言うてくる。

「兄さん！じゃあ次は私がしてあげますからね！」

「その次は私だぞ秋夜さん！」

「さて！何故そうなる！時と場所をわきまえろと言ったろ！？」

秋夜がそう叫んだ時秋夜の服の裾が引つ張られる。

「ん？」

秋夜が裾を引つ張られているのに気づき後ろを向くと

「しゅ、秋くん。わ、私もしてあげるからね／＼／」

頬を赤らめ、上目遣いで見てくるリアナがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

秋夜は無言でリアナを抱き寄せ頭を撫で始めた。

「え、しゅ、秋くん？はふ／＼／／」

撫でられたリアナは気持ちよさそうに目を細めた。それ見たアスカ、春陽、篝は同時に叫んだ

「」「秋夜（兄さん）（さん）！」「」「」

「うお！わかった！わかったから！一回だけお前ら言うことを何でも聞くからそれで勘弁してくれ！」

ついに耐えきれなくなりそう言ってしまった。

「「「「本当!?!」「」「」

「ああ!本当だからもう止めてくれ!」

後にこの約束がまた騒動をおこすなんて秋夜は思ってもいなかった。

「わ、われながら大胆な行動をしてしまいましたね／＼」

「あ、ああ／＼だがこれだけすれば秋夜さんも私達のことを意識してくれる筈だ」

「そ、そうですね／＼これだけすれば意識はしてくれるはず」

秋夜がいなくなった食堂でそんな会話をして春陽と筈であった。

## 第四話（後書き）

キャラが崩壊しているような気がする  
（・・・）

第五話（前書き）

今回は少しし少なめ

、・・・、

## 第五話

時間は経ち今は二時間目が終わり。休み時間。いつものメンバーと話しているとセシリアが近づいてきた。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど。まあ、一応勝負は見えていますけど？流石にフェアではありませんものね」

「？なんで？」

一夏のその疑問にリアナが答える。

「一夏くん。ISは、世界で467機しかないの。だから、専用機を持つ人は凄いだよ」

「そう！専用機を持つ者は全人類60億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「なん・・・だと？」

「そ、そうなのか・・・」

「そうですわ」

『人類って今60億超えたのか・・・』

「そこは重要ではないでしょうが！？あなた達！本当に馬鹿にしますの！？」

「そんなわけないよな〜一夏」

「兄貴の言うとおりだ」

『馬鹿になんかしてるわけない』

( )( )( )(嘘だ!)( )( )( )

心の中で教室にいた者全員の心がつうじあった。

場所は変わって剣道場。あの後、セシリアが怒ってどこかに行った以外は普通な時間をすごせた。さて何故、剣道場にいるのかと言うと春陽と箒が部活に行くと言ったのでついていくことにした秋夜達、来たとき剣道部の部員が近づいてきて少し話していたが今はちよつとした問題がおきていた。

「兄さん」

「秋夜さん」

『手合わせをお願いします』

春陽と箒が秋夜に手合わせをお願いしていた。

「ん〜、手合わせか〜…………よし、一夏に勝ったらやってもいいぞ」

「おい、兄貴！なんで、俺を巻き込むんだよ！」

ギヤアギヤア言っていた一夏だが結局やることになってしまい渋々竹刀と防具を取りに行った。結果はボロ負けもう還付なきまで負けされた。

「一夏はダメダメだな〜、まあ別にいいか」

「う、うるせ〜」

秋夜はバテている一夏にそう言いながら近づき落ちてる竹刀を手に取り春陽と箒に顔を向けて言った。

「防具はいらん。本気でこい、本気でこなければすぐに負けるぜ春陽、箒」

その秋夜の物言いに少しムツとなり2人は秋夜に向かって言った。

「兄さん……………あまりなめないでください」

「秋夜さん。後悔しても知らないからな」

そう言い構え直す2人。そんな2人に対して秋夜は

「なめてなどいないんだがな」

そう言い竹刀を右手で持ち腕ぶらりとさげ自然体になった。秋夜がそう言った瞬間2人は秋夜に向かって突っ込んでいった。

「ハアアアアアア！」

箒が気合いの声をあげながら竹刀を上段から振り落とされる。速い。確かに速いが秋夜は自然体の構えから少しだけ右にずれそれを避け、避けぎわに箒の胴に竹刀を一閃し、秋夜から見て右側から胴を狙って竹刀を振ってきた春陽の攻撃を逆手に持ち替えた竹刀で防ぎ、左腕を振り上げ春陽の顔寸前で止める。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

呆然としていた春陽と箒だが秋夜の言葉に我にかえる。

「強くなったな〜2人と俺に防御させるなんて。一夏とは大違いだ」

「さ、流石兄さん。手も足も出ませんでした」

「じ、これほどは・・・・・・・・」

そんな2人に秋夜は

「うむ、いつでも俺の所にこい。稽古をつけてやるぞ」

『は、はい！ありがとうございます！』

その後はしばらく春陽と尊に稽古をつけて他の剣道部の部員に試合を申し込まれるので試合をし、終わりぎわには部員全員と仲良くなつた秋夜だった。

第五話（後書き）

目の視力が下がった

（  
（  
（  
；  
（  
（

## 第六話（前書き）

ちょっと無理矢理すぎたかな？

まあ、とりあえず投稿

（ ・ （ ・ /

## 第六話

今日はセシリア・オルコットとの決闘の日。決闘まで色々あった、女子が部屋に押しかけてきたり、また女子が押しかけてきたり、なんか女子押しかけてはっかだっだな、そう言えば女子の中に「どうして年上なのに一年生からの」と聞いてきた奴がいたな「多分、政府の命令」って言ったなら「頑張ってください！」って言ってきたのは何故だろう？だいいち俺は高校行ってないから別にいいんだけど、何て考えていた秋夜だが、今日は決闘の日、少し集中しようと思いついていた顔をあげ前を見てみたが

「これが……」

何か無駄に感動している一夏がいた。

「お前もそこでボ〜としてないで早く用意をしろ」

「へ〜い」

千冬に言われ準備を始める秋夜。その頃一夏は

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫。いける」

「そうか」

ISの装着を終えていた。一夏の事が心配だったのかいつもと同じ

態度に見える千冬だが問題も無かったので、ほっとしたような声だった。

「フォーマットとフィッティングはどうするんすか？」

「ああ、お前とオルコットの試合が終わる頃には、どちらも終わりそうだ」

「そうすか、それじゃあ俺は自分の戦いに集中するか」

「あまり本気で相手はするなよ。すぐに終わってしまうからな」

千冬はそう言い秋夜を見た。千冬の言葉に対して秋夜は

「それは……まあ、わかりましたよ。なるべく本気はださないようにしますよ」

そう言い笑う秋夜。

「そうか。ではきおつけて行ってこい秋夜」

千冬が離れ今度は箒と春陽がこちらに向かってきた。

「秋夜さん……」

「兄さん……」

何か言いたそうな、けれど言葉をまよっているような、そういう表情を2人はしていた。

秋夜は笑顔で2人に近づき2人の頭を撫でながら、言ってきた。

「春陽、箒」

「な、何ですか？／＼／」

「な、なんだ？／＼／」

「勝ってくるぜ」

「は……はい。勝ってください兄さん」

「あ……ああ。勝ってこい」

春陽と箒に言ってからゲートの前に立ち、秋夜は自分の専用ISをダークナイト・ルーラ起動させた。

「こ、これが……」

「兄貴の専用IS……」

指輪が光を放ち、秋夜は専用機を瞬速展開させた。その姿は漆黒の装甲、左腕には大型シールドを装備し、右腕にはシールド、ビームライフル、剣を融合したような武器ファンタム・ザンパーを装備し、背中には漆黒の翼があり、翼には左側に筒状の物、右側に折りたたんだのである剣のような武器がある。最後に腰に小型のビット《スキュラ》が左右4個ずつ装備されている。その姿は

「黒騎士……」

誰かが呟いた。そう、その姿はまさしく黒騎士そのものである。

【デステイニーの背中 of 装着にエクシアの両腕の装着、ツヴァイ of フアングを装備して全部漆黑にした感じ】驚いているみんなを無視し空中に浮いてるセシリアの方に飛び、近づく。近づいてきた秋夜の姿にセシリアは目を見開き、驚いている。

「なツ！？黒騎士！？」

セシリアは2年前の《黒騎士事件》の事を思い出し秋夜に向かって叫んだ。

「あなたがあの黒騎士だと言っの！？」

セシリアが驚いているのを見て秋夜は口の端をつり上げながら

「さあゝな、俺は黒騎士なんぞ、知らんからな」秋夜のとぼけた様子にセシリアは

「くツ！まあ、いいですわ。あなたが黒騎士でも関係ありませんし、わたくしが勝利を得るのは自明の理。すぐにあなたを地面に這いつくばせてみせますわ」

「それはどうかな？そんな傲慢な態度だと足下すくわれるぞ？」

「ふんツ！そんな軽口たたけるのも今だけですわ！」

キュインツ！セシリアが言葉が終わると同時に手に持っている武器《スターライトmk?》を撃つ。閃光が秋夜を貫こうとした・・・が、

パシュンツ！

左腕の大型シールドで防いだ。

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲<sup>ワルツ</sup>で！」

キュインツ！キュインツ！射撃射撃射撃。弾雨のごときレーザーが降り注ぐ。しかし、

「な、なぜ当たらないんですのっ!?!」

秋夜はその弾雨を全て避けたり、シールドで防いだりしていた。

「くっ！それなら!」

セシリアは厳しい表情をしながら、ビット『ブルー・ティアーズ』を展開させ、二機多角的な直線機動で接近してくる。

秋夜の上下に回ったビットからレーザーが放たれようとしたが・・・

「お前だけが自立機動兵器を持っているなんて思うなよっ!」

秋夜は腰に装備されているビット《スキュラ》を6機展開し、上下にいるビットに向かって《スキュラ》を突っ込ませた。

「なっ！接近型の自立機動兵器ですって」

セシリアはビットを急いで移動させ《スキュラ》の攻撃をかわしてビットを戻し距離を取った。

「くっ！小型とはいえ、6機のビットを同時に操るなんてっ!」

そう言いセシリアは忌々しそうな目で秋夜を見るが秋夜はそれを鼻で笑いセシリアに言った。

「フン！だから言ったろ。そんな態度だと足下すくわれると」

「くツ！確かにわたくしは男を下等な生物だと思っていましたか・・・その認識は改めないといけませんわね」

セシリアがそう言つと今までとは違う力強い目で秋夜を見てきた。

「あなた、名前は？」

「・・・織斑秋夜だ」

「では、秋夜さん。今から私はあなたを対等な人間としてみますから・・・あなたも私を対等な人間としてみてください」

セシリアはそう言い不安そうな目で秋夜を見た。セシリアのその態度に秋夜は

「ああ、やっとその傲慢な態度を直してくれるのか。わかった、俺は君を・・・セシリアを対等な人間としてみよう」

そう、秋夜は微笑みながら答えた。

「あ、ありがとうございます／＼」

その秋夜の顔にセシリアは一瞬だが見惚れてしまった。

決闘でフラグをたてるとは思ってはいなかった秋夜は一瞬顔をひき

つらせてしまった。秋夜は一夏と違って鈍感ではないのである。

「それじゃあ、セシリア。いい試合にしような」

「はい、秋夜さん。しかし、そう簡単にはやられませんわ」

ここに、真の決闘が始まった。

第六話（後書き）

算を書くのが難しい、さて、どうしようかな  
、・・・、

## 第七話（前書き）

G Wが終わったら更新が不定期になりそうです  
、・・・、  
、

## 第七話

「ブルー・ティアーズ！」

セシリアが叫ぶと同時にビットがまた二機多角的な直線機動で接近してくる。それに対して秋夜は

「スキュラ！」

《ヒュンッ！ヒュンッ！》

腰に装備されているビット《スキュラ》を使いブルー・ティアーズの接近を許さない。

「くッ！」

ブルー・ティアーズのビットは4機それに対してダークナイト・ル  
ーアのビットは6機使われており、数的に負けているセシリアは  
ブルー・ティアーズに命令し一時的に下がらせる。それに対して秋  
夜も《スキュラ》を腰に戻す。

「……………やりますわね、秋夜さん」

「クククッ、セシリアもなかなかだぞ」

そう言いしばらく睨み合っていたがセシリアが秋夜に向かって言う。

「……………時間もありませんし、そろそろ閉幕と参りましょう」

「もうそんな時間か、楽しいと時間が流れるのを早く感じるな」

「ふふふっ、そうですね」

楽しそうに微笑み秋夜の言葉に同意するセシリア。その表情は先ほどとは違い純粹にこの決闘を楽しんでいるようだ。

「それでは、再戦といきましょうか」

そう言ったセシリアは《スターライトmk?》を構える。

「ああ、そうだな」

セシリアの言葉に返事をし右腕の《ファントム・ザンバー》を構える秋夜。

「ハアアッ！」

《キュインツ！キュインツ！》

先に仕掛けたのはセシリアだった。セシリアが持つ《スターライトmk?》から閃光が放たれ秋夜を貫こうと迫ってくる。しかし秋夜は右腕に持つ《ファントム・ザンバー》をソードモードにし迫ってくる閃光を《バシュツ！バシュツ！》切り裂いた。

「なッ！音速のレーザーを切り裂くなんてッ！」

セシリアの言う通り、並のIS操縦者ならばそんな芸当はできない。しかし秋夜は並の操縦者ではなく、本気を出せば千冬と渡り合えることが出来るのだ。しかし千冬と東の命令により秋夜は本気を出さないようにしているのだ。それでも代表候補生と渡り合えるのは彼も千冬達と同じで人外の域にいつているからだろう。

「いくぞッ！セシリア！」

秋夜はセシリアに向かってそう叫びながら突っ込んでいく。

「くッ！ブルー・ティアーズ！」

それに対してセシリアは《ブルー・ティアーズ》を展開させてレーザーを撃つが

「ハアアッ！」

秋夜は気合いの声を上げ、《瞬時加速》を使いをその攻撃を避け《ブルー・ティアーズ》に近づき一閃、《ギンッ！》  
真っ二つにされたビットは断面に青い稲妻を走らせ、1秒後に爆発した。

「なッ！瞬時加速まで使えるなんて！」

セシリアが驚いている間に《瞬時加速》をもう一度し、次は二機のビットを擦れ違いざまに《ギンッ！ギンッ！》切り裂き、後ろにいた最後の《ブルー・ティアーズ》を回し蹴りをして破壊しそのままセシリアに向かって近づく。

「ーーーーかかりましたわ」

ニヤリとセシリアが笑い《ブルー・ティアーズ》の腰部から広がるスカート状のアーマーのその突起が外れて、《弾道型》を撃つてきた。

「チイツ！」

秋夜はとっさにシールドと《ファントム・ザンバー》を前に突き出した。

ドカアアアンツ！

赤を超えて白い、その爆発と光に秋夜は包まれた。

「兄さんツ……………！」

「秋夜さんツ……………！」

「兄貴ツ……………！」

モニターを見つめていた春陽、箒、一夏が同時に叫ぶ。その声を聞いた千冬は春陽達に

「……フン、あいつはあの程度でやられるほど柔じゃない」

そう言いまたモニターに視線を戻す千冬。三人は千冬にそう言われモニターに視線を戻すとそこには、煙から巨大な荷電粒子砲がセシリアに放たれた瞬間だった。

(これなら流石に秋夜さんでも)

そう考えたセシリアだったがその考えが間違いだったことにすぐ気付く。

ー警告！敵ISにロックされていますー

「なッ!？」

その警告が鳴り終わった瞬間、煙から巨大な荷電粒子砲が放たれる。

ゴオオオオオンッ!

「くッ!」

とっさに避けるが荷電粒子砲が僅かに掠ってしまいでダメージを受

けてしまう。

ーバリアー貫通、ダメージ288。シールドエネルギー残量、41  
2。実体ダメージ、レベル中。ー

荷電粒子砲が放たれた余波で煙が吹き飛ばし秋夜が姿を現す。背中  
の左側に装備されている荷電粒子砲を戻し、ボロボロになったシ  
ールドと《ファントム・ザンバー》を捨て、ファントム・アーサー背中  
の右側に装備されて  
いる太刀引き抜き構える。

「流石だなセシリア！俺にこの武器を使わせるなんてな！」

「くッ！何ですの！？その馬鹿げた威力の武器は！」

すぐに体勢を立て直したセシリアが言ってくる。

「クククッ、この武器がファントム・バスター直撃したらシールドエネルギーがほぼ全部  
なくなるからな、次からはきおつけた方がいいぜ」

そう言いながら笑う秋夜。

「さて、次で終わりにするぞ！セシリアッ！」

「くッ！そんなことさせるのですかッ！」

そう言った瞬間、秋夜の背中の翼が開き粒子を出す。

「なら、俺を止めてみせるセシリアアッツツツ！」

「ハアアッツツツ！」

セシリアは《スターライトmk?》を連射してくるが、もの凄いスピードで射撃を避けながらどんどんセシリアに近づいていく。

「くっ！なんて機動力！これがあなたの……秋夜さんの本当の力だと言ってますの!？」

秋夜はセシリアの射撃を避け続け、遂にセシリアの目の前まで迫ってきた。

「なかなか楽しかったぜ、セシリア」

「……ええ、私も楽しかったですわ」

その言葉が終わると同時にセシリアに向かって《ファントム・アイサー》を振り落とした。

『試合終了。勝者ー織斑秋夜』

そのブザーが鳴った瞬間、ギャラリーの歓声が響いた。

第七話（後書き）

バカ2人が俺を連れまわしたせいで執筆ができない

まあ、大丈夫だろう

## オリIS設定(前書き)

この投稿後は不定期になりそうです

、・・・、

## オリIS設定

IS名『ダークナイト・ルーラア（闇夜の支配者）』

世代、第四世代

制作者、篠ノ之束

待機状態、漆黒のダイヤが付いた指輪

外見、他のISに比べ線が少し細い。黒を基調とした装甲を持ち、関節の部分が紅色になっている。背中部分に2枚の高出力推進翼があり、左側に超高密度荷電粒子砲があり、右側に超高出力対艦刀が備わっている。腰部には半自律型ソードビットが左右に4つずつある。

詳細、基本的には近、中距離型だが遠距離は秋夜があまりやらないだけで、出来ないわけではない。全ての距離でオールラウンドに立ち回れる全距離対応型ISだが遠距離の武器を使うと隙が大きいので基本的に近距離型の武器と中距離型の武器を使い、レーザーを連射したり、近づいて斬りつけたりする。

高速機動をし、射撃を避けながら近づいて斬るのが基本なのでシールドエネルギーは結構高め。万能型のISだがデメリットがある。

能力が高めのため、使いづらく、扱える者がいなく、しかも情報処理、演算処理、並行処理など処理能力が高くないといけない。そのため今の所秋夜以外には使えない。

## 武装

### 腕部装備

- ・接近兼射撃武器【ファントム・ザンバー】
- ・大型シールド

### 腰部装備

- ・半自律式高機動突撃機【スキュラ】

### 背部装備

- ・左側装備・超高密度荷電粒子砲【ファントム・バスター】

右側装備・超高出力対艦刀【ファントム・アーサー】

・高出力推進翼【ファントム・ウィング】

ワンオフ・アビリティー

名称、不明

詳細、不明

## オリIS設定（後書き）

とりあえずIS設定を作ってみました。

ワンオフ・アビリティーはまだ使っていないので不明にしております。

## 第八話（前書き）

カンダムSEEDに影響されて、弟の名前を叫びながら遊戯王をしている作者は末期かも（・・・）

## 第八話

セシリアとの試合が終わり少し休憩時間をとってから次の一夏の試合をすると言つことので一時的に休んでいる秋夜。そこに春陽、箒、一夏が来て話しかけてくる。

「おめでとつございます兄さん！凄かったですよ、先程の試合！」

「うむ。流石秋夜さんだ。」

昔から秋夜の事を懂れていた春陽と箒は秋夜を褒め称える。

（兄貴。いつの間にあんな技術を手に入れたんだ？）

一夏は先程の試合で見せた秋夜のIS技術の高さにちょっとした疑問を持っていた。

（とりあえず兄貴に聞いてみるか）

思考するのを止め、秋夜に近づくと一夏。

「なあ、兄貴」

「ん？なんだ一夏？」

「兄貴はどこでISの技術を手に入れたんだ？」

一夏の言葉を聞き春陽と箒もそう言えばそつだと言つ顔になり一夏と同じ質問を秋夜にした。

「そう言えばそうですね。どうなんです兄さん」

「む？言われてみればそうだな。あんな技術どこで手に入れたんだ秋夜さん？」

そう問われた秋夜は少し考えた後一夏達に答えた。

「ん、どこでって言われてもな。束の姐さんの所でISの事を聞いた。後は独学だ」

束の名を出した時、箒の顔が少し不機嫌そうになったが秋夜は気にしない事にした。

「……は？マジか兄貴!？」

「……殆ど独学って、本当に凄いですね兄さんは」

「独学だけって……ボソツ、やっぱり兄貴も千冬姉と同じ所まで来ているんだな」

「……」

春陽、箒、一夏は呆れ半分、驚き半分と言う顔をしていた。そんな事を話している内に試合の時間になり千冬が秋夜の所に歩いてきた。

「何時まで、喋っているつもりだ。早く用意しろ」

千冬に言われた秋夜、一夏は喋るを止めすぐに用意をする。

「それじゃあ行くか」

秋夜が気楽そうに言うのと秋夜のISが瞬時に展開される。  
ダークナイト・ルーラー

「くそ、兄貴何かに勝てるわけないだろ」

一夏が諦めたような声で言っているが殆ど無視されている。そんな正反対な表情をしている2人は試合をするため、空中に行き向かい合う。

「一夏！俺はお前の剣の腕がどれほど戻ったか見るためにこの武器以外は使わん！」

秋夜はそう言い両腕の装備を『収納』し、背中の対艦刀ファンタム・アサを引き抜いた。

「春陽と箒にお前を鍛え直してくれと頼んどいたがもしこの決闘で何も出来ずに負けたら……俺がお前を鍛え直してやろう」

そう秋夜は剣道場で一夏の体たらくをみて春陽と箒に一夏を鍛え直してくれと頼んだのだ。

「じよ、冗談だろ、兄貴！」

「……冗談に見えるか？」

秋夜の言葉を聞いた一夏は、昔秋夜に一時期だが鍛えられた事があり、その時の生き地獄に近い特訓を思い出し顔を青くする。

「わ、わかった！全力で行くからそれだけは勘弁してくれ！」

「なら、全力で来い！！俺を認めさせてみるッ！！！」

その言葉と同時にブザーがなる。

「ハアアアアア！」

雄叫びを上げながら一夏に向かって突っ込んでいく秋夜。それに対して一夏は

「ウオオオオオオ！」

真っ向から迎え撃った。

《ガキイイイーン！》

切り上げ、突き、など秋夜の攻撃の嵐を防ぎきった一夏だがどうにかして攻撃しようとし鏢競り合いに持ち込み、出方をうかがっている。

「ハハハッ、やるな一夏！まさかこの一週間だけでここまで出来るようになるなんてな！流石、俺達の弟だな！」

秋夜は嬉しそうに言う。

「だが………」

秋夜は鏢競り合いを止め一夏の腹に向かって蹴りを入れた。

《ドカツ!》

「がああッ!」

「まだまだ甘い!」

蹴りを入れ距離を置く秋夜。それに対して一夏も距離を取る。

「クククッ、これなら楽しめそうだな」

秋夜はそう言い《ファントム・アーサー》構え直す。

「それじゃあ、行くぞ一夏アアアッ!」

「来い、兄貴イイイッ!」

《ガギイイイッン!!!》

それからしばらくは斬り合いが続いていたが

「……………ハアア……………ハアア」

一夏は満身創痍な状態、秋夜はまだ余裕がありそうな状態だった。

「なかなかやるな一夏。だが、これで最後だ」

秋夜はそう言いある構えをする。

「ッ！その構えは！」

一夏はその構えが自分が尊敬する姉————千冬の物と同じだと気づく。

「……………一夏、お前はこの技を使うに値する者だと俺は判断した。」

「あ、兄貴……………」

秋夜の言葉に一夏は驚いたような顔をする。それは少なくとも一夏を実力者として認めた事だからである。

「……………ああ、兄貴。俺も、全力でいくぜ！！！」

一夏は嬉しそうな顔をしながら《雪片弐型》を構える。

「……………」

「・・・・・・・・・・」

一瞬の静寂の後、秋夜と一夏は同時に動く。

「ハアアアアアアッ！！！」

「ウオオオオオオッ！！！」

《ガギイイイッン！！！！》

静寂、誰も喋らないがすぐにその静寂も終わる。

《ドサッ》

倒れたのは—————夏だった。

『試合終了。勝者―織斑秋夜』

そのブザーが響いた瞬間、セシリアとの決闘と同じくらいの歓声に包まれた。

## 第八話（後書き）

これからは一週間に一回は更新出来るようにするつもりです。

番外編〈春陽と篝の想い〉（前書き）

学校とか色々ありすぎて更新が遅れてしまいました（＾　＾；）

これからは一週間に一度は必ず更新したいと思います

（・・）／

では、思いつきで書いてみた番外編をどうぞ

## 番外編〈春陽と箒の想い〉

秋夜や一夏がIS学園に入学した初日の放課後、春陽と箒は秋夜達の事について話しながら廊下を歩いていった。

「……………箒さん」

「……………何だ、春陽？」

「……………兄さん、昔よりカッコ良くなりましたよね」

「……………ああ」

「それに大人っぽくなりました」

「ああ、そうだな。確かに、カッコ良くも大人っぽくもなった……………しかししな」

「……………わかっていきますよ、箒さん」

『ライバルが2人も増えましたね（たな）』

春陽達が言った2人はこの話を察するにおそらくアスカとリアナのことだろう。

「箒さん」

「な、何だ？」

春陽が真剣な顔をしながら箒に話しかけた。春陽は気づいていないが春陽が真剣になると凜とした迫力がある顔になるのだ。春陽のその顔を見た箒はやや狼狽しながら返事をした。

「少し言いつらいですけどこれを言わないと話しが進まないの言います。」

「……おそらくアスカさんとリアさんは既に兄さんとの線を越えてると思います」

「なっ！そんなわけ……いや、秋夜さんならありえるかもしれないが」

箒は否定しようとしたが秋夜の性格を思い出し言いよどむ。

「な、何を根拠にそう思うんだ？」

箒は完全に否定出来ず話しを変える。

「まあ、勘ですけど間違いだとは思いません」

「何故だ？」

「私達が兄さんに近づいて自分をアピールしても2人は余裕そうな態度のままでした。それが意味することは兄さんとの何らかの繋がりがあると思っただからです」

「なるほど、言われてみれば確かにそうかもしれない」

「はい、ですから既にアスカさん達と兄さんは……」

「・・・・・・・・・・」

春陽のその言葉に2人は少し悲しそうな顔をする。春陽が言った事はほぼと言つより全部当たっている。勘なのに高確率で当たるのは流石と言つしかない。恐るべし女の勘。

「・・・・・・・・これから対策を考えようと思います。箒さんも一緒に考えましょう」

「・・・・・・・・ああ、そうだな。具体的な話は部屋についてからにしよう」

この空気をどうにかしようと思つて春陽が箒に提案する。

箒の言葉に春陽は頷き、それから無言で部屋に向かう2人。今更だがこの2人は同室なのだ。

(さて、これからどうしましょう。兄さんは一夏と違って鈍感ではないですから、積極的に迫ればいけないと思います。)

(さて、対策と言われても具体的に何をするか。料理でも作って自分をアピールしてみるか?)

そんな事を考えていた2人だが何故か昔の事を思い出していた。

(そう言えば昔兄さんに箒さんとどちらが好きか聞いた事がありましたね)

(そう言えば昔私と春陽のどっちが好きか聞いた事があったな)

春陽と箒は箒達が引越す前に秋夜に聞いた事を思い出した。

『どっちが好きかだろ？そんなもん2人とも好きに決まっているだろ！て言うか俺が好きになった奴は全員俺の嫁にする！法律？そんなもん関係ねえ！』

秋夜の言った言葉を思い出して2人は同じ結論にたどりつく。

(……あれ？対策なんて意味ないんじゃないか？)

(……む？対策など無意味じゃないのか？)

その結論にたどりついた2人だがいつの間にか部屋の前まで来ていた。

ガチャッ

とりあえず鍵を開け部屋に入る2人だが部屋に入った瞬間、顔を見合わせ先に春陽が言う。

「……箒さん」

「……何だ、春陽？」

「対策……意味ないんじゃないかと思うんですけど」

「……ああ、私もそう思う」

『ハアア』

2人同時にため息をはく。

「……………気分変えるために、少しシャワーを浴びてくる」

「わかりました……………」

そう言いシャワー室に入っていく筈を確認し春陽はベットに腰を下ろした。

「兄さんは相変わらずでしたね」

独り言のように春陽が呟く。

（兄さん、4年間も会ってないのにすぐに私だと気づいてくれましたね）

そんな事を考えていると春陽の頬が自然と緩んでくる。

「ふふふっ」

微笑みながら春陽は手作りの《秋夜人形》手に取り、抱きしめた。

（兄さん、私は何年経っても兄さんの事を想い続けますよ）

春陽は大好きな義兄を想いながら昔の事を思い出していた。

（兄さんは私を助けてくれた。それだけじゃなくて家族の温もりもくれた）

昔親に虐待されていた春陽は5歳の時に逃げ出したが傷や空腹のせ

いで倒れてしまったが偶然秋夜が見つけたのだ。見つけた秋夜は急いで春陽を背負い家に連れて帰り傷の手当てをし、簡単な料理を作り春陽に食べさせた後、何があつたのか聞いたが春陽は今まで誰にもこんな事をされた事がなかつたので少しの間、戸惑っていたが意を決して虐待の事を泣きながら秋夜に話した。虐待の事を聞いた秋夜は春陽を家に泊めさせ千冬に相談した後、千冬が警察に通報し、虐待の事を話し春陽の親を逮捕した。その後秋夜は春陽を養子にしようとして千冬に頼みこんだ。初めは渋っていた千冬だがベットのうえで秋夜に抱きつきながら小刻みに震えながら秋夜に『離ればなれはヤダよ、お兄ちゃん・・・』と言う春陽を『大丈夫』と言いながら慰めている秋夜を見て『ま、まあ1人ぐらい増えてもどうにかなるだろう』と家計の事を気にしながらも千冬は養子にする事を了承し、その後春陽は織斑家の養子になった。

(私はあれ以来兄さん以外の男性の事なんて考えられなくなつてしまつたんですよ、兄さん)

春陽はその容姿、スタイル、頭の良さ、まさに容姿端麗、才色兼備、頭脳明晰な彼女は今まで男女問わず色々告白を受けていたが全て断つていた。ただ1人の行方不明になつた大好きな兄を一途に想い続けて遂に今日、再会したのだ、彼女の喜びは計り知れない。

(・・・ああ、ダメです。兄さんの事しか考えられません)

おそらく春陽は秋夜の命令ならなんでも聞くだろうし、秋夜が死んだら自ら命を絶つだろう。春陽は秋夜依存症と言つていいほど秋夜に依存していた。

(・・・兄さん、早く私の気持ちを伝えたいですよ、兄さん)

春陽は別に秋夜が他の女性を愛していても自分を同じくらいに愛してくれさえすればいいと思っている。

「愛してますよ、兄さん」

春陽の眩きは虚空に消えていった。

春陽が自分の秋夜に対する想いを考えているころ篤も秋夜に対する想いを考えていた。

サアアアアア……

シャワーを浴びながら篤は6年ぶりに再会した自分の憧れであり、目標であり、好きな男性である秋夜の事を考えていた。

(……秋夜さん、昔と変わらず自分に正直なようにしていた

な)

篤は昔の事を懐かしむような顔をしながら思い出していた。

『カツあげ何てセコい真似しやがって、俺がお前達を肅正してくれるわッ！！！』

そう言った後、笑いながら黒塗りの木刀で不良達をボコボコにしている秋夜の姿を思い出してしまった篤は、

「……ま、まあ自分に正直すぎるのも考えものだな」

少し顔を引き吊らせ、改め秋夜は人外的一种かもしれないと思っていた。ふと昔の事を懐かしんでいた篤だが自分の喋り方が昔と変わらず男っぽいままだと思いつつ少し苦い顔する篤。

(秋夜さんはこの喋り方が嫌いじゃないだろうか?)

そんな考えが頭によぎったがすぐにそんな事はないと頭を振る。

(……いや、秋夜さんの事だ。きつと受け入れてくれる)

そうは思いつつも不安そうな顔は直っていない。

(……そう言えば秋夜さん、私の事を綺麗と言ってくれたな。それに6年ぶりに会ったのにすぐに私だとわかってくれた)

6年。それも9歳からの6年である。顔は当然、体も全く別物に成長しているというのに、かつての幼なじみは名前を聞く前からわかっているようだった。それに綺麗と言われた篤は

「ふっ」

嬉しそうに頬を緩め、微笑んでいた。

(・・・秋夜さん、私はあなたの優しさとその揺らぐ事のない心に惚れてしまった)

箒は緩んでいた顔をいつもの凜とした表情に戻す。

(ふっ、初めはただの憧れだったんだがな)

箒は秋夜の剣術や人柄に憧れ、家が近いという理由から何時も秋夜の後ろに付いてまわっていた。初めはただの憧れだったが箒が小学生の時、その性格や口調で一人で友達も出来ずに寂しそうにしている所に何時も秋夜が必ず現れて箒をみんなの輪の中に連れて行って一緒に遊ぼうと誘い一緒に遊んでいるうちに友達も出来、虐められている時は必ず助けに来てくれる秋夜に対して憧れが好意に変わっていた。

「秋夜さん。あなたのおかげで今の私がいるんだ。・・・私は諦めるつもりはないからな」

箒は凜とした声で言う。

「私もいつかあなたの隣に立てる女性になってみせる」

箒はそう言い鏡に映る自分を見る。その顔は覚悟を決めた美しい女性顔になっていた。

その2人の願いはあまり遠くない未来で叶うことになる。

番外編〈春陽と箒の想い〉（後書き）

無理矢理な気がするけど後悔はない!!!

## 第九話（前書き）

これからは更新が不定期になるかもしれない

すいません m ( ( m

## 第九話

決闘が終わった翌日、朝のSHR。一夏は呆然としていた。

「では、1年1組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、1繋がりでもいい感じですね!」

山田先生は嬉々として喋っている。

「先生質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合で兄貴に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか?」

「それはー」

「それはだな一夏、俺が辞退したからだ!」

ガタンと立ち上がり、秋夜が一夏に言った。

「はっ!?!?どう言う事だ兄貴!?!」

「うむ。それはだな一夏、お前はISの技術、知識が全くないだろ?」

「うぐっ、確かにそうだけど……」

秋夜の正論に全く反論出来ずに口ごもる一夏。

「やはり、ISの操縦は実戦が何よりの糧。そして、代表と言う事で必然的に知識を身につけなければいけない。……………どうだ、一夏？嬉しいだろ？こんな弟思いの兄をもって」

「……………ああ、兄貴。本当に涙が出そうだ」

「そうか、そうか、泣いてもいいんだぞ」

「……………で、本音はどうなの秋夜？」

アスカが秋夜に本音を聞いてきた。それに対して秋夜は

「クラス代表めんどくさ〜い」

正直に答えた。

「……………流石に正直すぎるでしょ」

「しゅ、秋くんは神経が太いと言うか何て言うか……………」

秋夜の正直さにアスカ、リアナだけではなくクラス中が呆れている。

「先生、やはり代表は兄貴がいいと思います」

そんな状況に一夏は今だと言わんばかりの声で山田先生に言うが

「ふっ、一夏。敗者が勝者の言う事が聞けないのか？」

秋夜がやれやれと言う感じで一夏に言う。

「くっ、ならオルコットでも……」

「それも問題ない。なあ、セシリア」

「はい、残念ながら今回は秋夜さんの言ったとおりなのでわたくしも辞退させてもらいましたわ……。ゴニョ、それに秋夜さんの頼みでもありますし／＼」

セシリアは少し頬を赤くして言う。一夏の退路は全て断たれ、一夏は机に突っ伏していた。

(ん？そう言えば)

一夏はふと今思った疑問を秋夜に言う。

「なあ、兄貴。何時の間にオルコットとそんな仲良くなったんだ？」

「ん？ああ、それはな決闘が終わった後、セシリアが俺に謝ってきたな。俺も悪い所が合ったから謝ったんだよ。その後、名前で呼んでくれと言われてな。それからお互い名前で呼び合うようになったんだよ」

「へええ」

一夏が秋夜の話の聞いていると千冬が最後に話を締めくくる。

「では、クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

『はっい』

一夏を除くクラス全員が一丸となって返事した。一夏がその事実を知りまた机に突っ伏した。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。秋夜、織斑、オルコット。試しに飛んでみせる」

「・・・眠っ」

「パンツ！」

「痛ッ！」

4月下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部なくなった頃。今日も秋夜達は鬼教官こと千冬の授業を真面目？に受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」

（いてえ〜。姉貴は少しぐらい手加減してくれてもいいのにな〜。  
あ〜癒やしが足らん今度アス力達の部屋にでも行こうかな〜）

頭の中でそんな事を考えていた秋夜は千冬に何か言われる前にISを瞬時に展開した。それに続きセシリアも瞬時に展開したが一夏がもたもたしており千冬にせかされる。

「集中しろ」

次は叩かれる。瞬時にそう感じ取った一夏は白式を展開する為に心に中で呟く。

（来い、白式）

刹那、右手首から全身に薄い膜が広がり、約0.7で展開した。

「よし、飛べ」

言われて秋夜とセシリアの行動は早く、急上昇し、遙か頭上で静止する。それに遅れ一夏も後に続く。

「何をやっている。ダークナイト・ルーラアはともかく、スペック上の出力ではブルー・ティアーズより白式の方が上だぞ」

千冬にダメ出しされ少しうなだれる一夏。

「一夏、考えるな感じる」

「いやいや、そんなでわかるか!？」

「全くダメダメだな。それじゃあセシリア、分かりやすい説明を頼む」

「はい。わかりましたわ、秋夜さん。一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

「説明はいいが長いぞ。なあ、セシリア」

「はい。反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

そう言いうなだれる一夏。

「と、所で秋夜さん」

セシリアが話を変え、秋夜に話しかけてくる。

「秋夜さん、よろしければ放課後にわたくしに指導してくれませんか？そのときはふたりきりでー」

『秋夜さんっ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！』

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。見ると、遠くの地上では山田先生がインカムを筈に奪われておたおたしていた。そのすぐ側で春陽がこちらを睨みつけている。

「秋夜、織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から10センチだ」

「了解……それじゃあ誰が一番初めにやる？」

「では秋夜さん、わたくしが」

言って、セシリアはすぐさま地上に向かい地表12センチで完全停止を成功させた。

「おお、やるなセシリア。それじゃあ一夏次は俺が行くからな」

「おう、わかつたぜ兄貴」

秋夜は言葉を終わると同時に急下降し地表7センチで完全停止をした

「流石だな」

千冬から賞賛の声をかけられクラスメートから感心の声と拍手が贈られる

ギョーンツーーーーズドオオン!!!!

いきなり大きな音がしたので秋夜やクラスメート達は一斉に音のした方向を見るとそこには……一夏が地面に埋まっていた

『アツハツハツハツハツハツッ!!!!』

秋夜とアスカは爆笑、クラスメート達はくすくす笑っていた。

「馬鹿者。誰が地上に激突しると言った」

「……………すみません」

一夏が千冬に謝っていると秋夜が徐に一夏に近づき肩に手を置きこんな事を呟いた。

「一夏、お前には才能がある……………俺と組んで芸人にならないか？」

「いやいや、やらないからッ!？」

「一夏、俺とお前が組めばM1出場間違いないじゃないか!?!お前はその才能を棒に振るのか!？」

「え?何で俺こんな必死に説得されてんの？」

秋夜と一夏がふざけている間に千冬はセシリアに武装の展開をさせ、ダメ出しを言っていた。

「……………何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では接近の間合いに入らせません！」

「ほう。秋夜との対戦で簡単に懐を許していたようにみえたが？」

「あ、あれは、その……………」

セシリアはごにょごにとまごついていたが、秋夜をキッと睨んだ。

秋夜はそれに気づき見つめられいると勘違いしたのかセシリアを見つめ返したらセシリアは顔を真っ赤にして、「そ、そんなに見つめられたら……」「ここによここによとそんな事を呟いていた。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

一夏は千冬にそう言われて誰か手伝ってくれないかと篤、セシリアを見るがすでいなく、秋夜に関しては両腕にアスカと春陽が抱きつき、リアナが背中に抱きついているのにも関わらず、もの凄い速さで走って行ってしまった。その非常識さに周りの女子数人がポカーンとしている。

「あ、兄貴見捨てやがったな――！！！」

一夏は秋夜が走って行った方向に向かって叫ぶが自業自得だなと思いい、仕方なく一人で片付ける事にした。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜。IS学園の前にポストンバックを持った少女が立っていた。小柄で艶やかな黒色をした髪を左右それぞれ高い位置で結んだ少女はキョロキョロと周りを見渡していた。

「え〜と、受付ってどこにあるんだっけ」

少女は上着のポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出す。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあるのよ」

少女は受付が見つからずイライラしていたが、ふとある男子のことを思い出す。

（元気かな、アイツ）

ふと、声が聞こえる。

「だから……でだな……」

視線をやると自分の知る人物がIS訓練施設から出てきた。知り合いに会えた事により自然と笑みがこぼれる。

（あれは春陽じゃない！？それに横にいるのは秋夜さんかな？あの

人と会うのは久しぶりね)

少女は声をかけようとして、小走りに走る。

「兄貴！少し待ってくれ！」

少女は不意を突かれて、自分の一番よく知っている人物の声が聞こえて体がびくと震え、その足を止める。

(あたしってわかるかな。1年ちょっと会わなかったただけだし、わかるよね。それにわからなかったら、あたしが美人になったからだし！)

超ポジティブ思考にスイッチを入れて、少女は再び歩みを再開する。

「いちー」

『織斑く〜ん』

少女は一夏を呼ぼうとするが女子の集団に声を遮られる。

「おわッ！？な、何だよ」

「織斑くん！この後一緒に食事でもどうかな」

「あッ！？ずるい！それじゃあ私も一緒にいいかな」

「え・・・あ・・・その・・・」

秋夜の周りはレベルの高い女子が多く、しかも秋夜にこれ以上女子

を近づけないように必ず何時ものメンバーの内1人は秋夜にくっ付いており、自然に女子達は一夏の方に行ってしまったている。

そんな理由も知らず少女は現在の一夏の状態を見てイライラしている

(誰よ、あの女の子達は？それより何デレデレしてんのよッ！)

少女はその後すぐに総合事務受付を見つけた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

少女は受付を終え事務員に質問をしていた。

「ああ、噂の子？一組よ。鳳さんは二組だからお隣さんね」

「二組の代表って、もう決まっていますか？」

「決まっているわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

少女……鈴音の態度におかしなところを感じたのか、事務員はすこし戸惑ったように聞き返す。

「お願いしようかと思って。代表、あたしに譲ってっー」

にっこりとした素晴らしい笑顔だが、バッチリ血管マークがついて

いた。

第九話（後書き）

スランプが……

（\*、、）  
||

第十話（前書き）

今日から夏休み

## 第十話

「織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

ぱん、ぱんぱん。クラッカーが乱射され、女子達は飲み物を手にキヤイキヤイ、やいのやいのと盛り上がっている。

「……………」

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』

とデカデカと書かれた紙が掛けており、一夏はそれを見て顔をしかめっ面にしながら何度も溜息をはいている。

アスカ達とワイワイ喋っていた秋夜が溜息ばかりはいている一夏に気づいて一夏に近づき、話しかけてきた。

「どうしたんだよ一夏、そんな面して」

「……………元はといえば兄貴のせいだろ」

一夏はチラツとデカデカと書かれたいる紙を見た後、また溜息を  
いた。

「一夏、お前ISの知識が全くないだろ、クラス代表になったら対  
抗戦とかでISを動かす回数がふえるからな。覚えるより慣れた方  
がお前にはあつてるだろ」

一夏は秋夜の言葉に確かにそうだと思い、またうなだれてしまう。

「秋夜くくく何してんの、早く一緒に楽しもうよ」

一夏と秋夜が少し真面目な話しをしていると、アスカが秋夜の背中  
に抱きついてきた。

「おっと、急に抱きつくなアスカ、危ないだろ」

「んぐ、だって秋夜が一夏ばかりかまって私達のことをかまってく  
れないからいけないんだよ」

アスカは秋夜の背中に抱きついたまま、唇を尖らせながら言う。

「それは悪かったな……………それじゃあ、今からかまってやるよ」

秋夜はその発言をした後すぐに背中に抱きついていたアスカを自分の正面にもってきて、そのまま抱きしめた。

アスカのことを羨ましそうに見ていた女子達やわいわいしていた女子達がピタリと動きを止めて秋夜達の方を凝視する。

『きゃあああああつー!!』

一瞬の静寂の後、すぐにまた騒ぎだす女子達はやはり元気が有り余っているようにしか思えない。

『ずる〜い、アスカさん』

『秋夜さん、私も抱きしめて〜!』

『私も私も!』

秋夜は横にいた一夏をひっぱて自分の前に差し出した……………イケニエとして

「俺はそんなサービスはしておりません。してほしい人は彼女なし

の一夏くんを抱きしめてもらおうといよいよ」

「ちょっ！兄貴、あんたッ！！！あつ、ちょっとまって、なんでそんなキラキラした目で俺を見るの！？あ、兄貴逃げんな！ちょっ！まッ！」

『「ギヤヤヤヤヤヤッッ！！！！！！！！！」』

『……………』

あの場から脱出した秋夜と秋夜についてきたアスカ達五人は一夏に合掌している。

「とりあえず屋上でもいくか、このまんま部屋に帰るのもなんだし」

「そう……………それじゃあ私とイチヤイチャしよ」

そう言っただけでアスカは秋夜の腕に抱きついてきた。

「ア、アスカさんなにをしますの!？」

「なにっで、見てわからない?イチヤイチャしてるだよ」

アスカの言葉にセシリアは唖っているが何時の間にか秋夜に近づいていた春陽がアスカが抱きついていて反対側の秋夜の腕に抱きついた。

「なッ!?春陽、何時の間……………」

隣にいたはずの春陽が何時の間にか秋夜の腕に抱きついていて驚いている筈だがセシリア同様少し不機嫌そうな顔になる。

「兄さんがいけないんですよ。何年も私をほったらかしにするんですから」

春陽は他の人達など関係ないと言わんばかりに自分の世界に入っていた。

「わ、悪かったよ春陽、もう俺はどこにも行かないから」

「……………本当ですか」

「ほ、本当だって」

春陽は不安そう顔と雰囲気を醸し出しながら秋夜のことを潤んだ瞳を上目遣いで秋夜を見つめてくる。

秋夜も珍しく焦ったような声で春陽に言ったが春陽の瞳からハイライトが徐々にきえていく。

「……………じゃあ私達の部屋にきてください」

「?????別にいいけど……………」

秋夜がそう言った瞬間春陽は口元を吊り上げて妖艶に笑った。

「フフフッ、それじゃあすぐに行きましょう兄さん」

秋夜とセシリアは春陽の言動がよくわからなかったようだがアスカ達はわかったようで、アスカは面白そうにニヤニヤしており、リアナと箒は顔を真っ赤にして俯いている。

「春陽、私達も混ぜていい？」

アスカの言葉に春陽は少し考えてからアスカの方を向く。

「最初は私と箒さんに譲ってくれるのなら構いませんよ。後、いいんですかアスカさん？」

「別にいいよ、2人はいい娘だからね」

クスクス笑いながらアスカは言うが春陽はまだ納得できないという顔をしてアスカを見ている。それに気づいたアスカは珍しく困ったような顔をしながら箒に言う。

「……………それに秋夜は色々モテるからね」  
アスカの言葉に春陽は納得した表情になる。

「……………それもそうですね。なら私達も早めにヤツたほうがよさ

そうですね」

そう言って春陽は箒を見る。

「箒さんはどうしますか？」

強制ではないのでやりたくなければ「いく」「…はい？」

「私もいくと言っているのだ。その……私も……秋夜さんのことが……ゴニョゴニョ／＼／＼／＼」

顔を真っ赤にしているが箒も色々決意が決まったような顔をしている。

「それでは決まりですね」

春陽がそう言って締めくくると静かに黙って秋夜が春陽に話しかける。

「……………これで話しは終わりか？」

「あ、はい、それじゃあ行きましょうか」

春陽の言葉に全員が返事をし、春陽達の部屋に向かって歩きだした。

部屋についてすぐに秋夜は春陽と等々にベッドに押し倒されて春陽にキスされていた。

「ちゅッ……………んっ……………はぁ……………兄さん……………／／／」

「春陽……………」

「兄さん、愛しています／／／」

「……………秋夜さん」

「なんだほうムグッ……………」

春陽に愛の告白をされどつするか悩んでいると箒に呼ばれ箒のほうに顔を向けた瞬間に箒にもキスをされ口をふさがれてしまう。

「ちゅっ……………んっ……………はぁ……………秋夜さん／＼／」

「箒もか……………」

「私も愛しています秋夜さん／＼／」

秋夜は春陽と箒の告白に何も言ってこないアス力達を見ると微笑みながら頷いてきた。同時にセシリアも見だが顔を真っ赤にして絶句している。

「……………春陽、箒」

「はい」

「本当にいいのか？」

俺は優柔不断で複数の女性を同時に愛そうとする最低野郎だぞ」

秋夜の言葉に春陽と箒が少し怒ったような顔をする。

「そんなこと言わないください。兄さんは私を救ってくれました。そんな私の大好きな兄さんが最低なんてことはありません！！！」

「そうです、秋夜さん！！！」

秋夜さんは私にとっての憧れであり、目標でもあるんです。だから自分のことをそんなふうに言わないください」

春陽と箒はそう言って秋夜をさらにきつく抱きしめる。

「ありがとう春陽、箒……………」

秋夜も2人を愛おしそうに抱きしめる。

「……………ところでセシリアは大丈夫なのか？」

『あっ』

春陽や箒だけではなくアスカやリアナまでセシリアのことを忘れて

いたようだ。

チラッと秋夜はセシリアを見てみると顔を真っ赤にしながらも何かを決意したような瞳を秋夜に向けていた。

「……………秋夜さん、わ、わたくしも秋夜さんのことを……………」

…あ、愛しております。迷惑でなければわたくしのことも春陽さん達と一緒にわたくしのことを……………」

セシリアは唇をギュッと噛み締め、瞳に涙を溜めながら目を逸らさずに秋夜のことを見つめている。

秋夜は先程と同じようにチラッとアスカ達を見るとアスカ達はアイコンタクトで「秋夜にまかせる」と言っているので秋夜は正直な気持ちでセシリアに言うことにした。

「セシリア、俺達はまだ出逢って数日しか立っていない。お互いに知ってることは少ないし、いきなり告白されて俺は正直、戸惑っている」

「……………」

秋夜の言葉にセシリアは俯きながら肩をふるわす。必死に涙を流さないようにこらえているようだ。

「……………だけど俺は俺のことをここまで真剣に思っているセシ

リアの告白を完全に断ることができない優柔不断な男だ」

「……………え？」

「出逢って間もないならこれからお互いのことを知っていけばいい。こんな優柔不断な俺だけどこれからセシリアも俺の側で俺のことを支えてくれるか？」

優しい笑顔で秋夜はセシリアに言うとセシリアは先程の表情と打って変わって笑顔になる。

「はいッ……………!!」

セシリアは嬉し涙を流しながら自分でもわかるぐらいに今まで生きてきた中で一番綺麗な笑顔を浮かべた。

「……………もう我慢しなくていいよね？」

「ん？」

アスカがそう呟くとアスカは秋夜に抱きついた。

「「あぁッ!?!?」」

セシリアとリアナはいきなり秋夜に抱きついたアスカに嫉妬の言葉をはく。

「ずるいですわよ、アスカさん!?!」

「そっだよ、ア〜ちゃんだけずるいよ!?!」

セシリアとリアナはアスカにそう言ってすぐに秋夜に抱きついた。

「いやいやセシリアもセシリアで行動が早いし、リアナはなんかテンションがおかしくなってない?」

「私は何時もどおりだよ」

「ん?あ〜、そういうことね。そういうえばここには私達以外はいないからね」

「どいじにどいじですの?」

リアナの秋夜に対する甘えぶりが何時も以上であることに疑問をもったセシリアはアスカにそのことを聞く。

「リアナは完全に心を開いた人達以外の前では秋夜に甘えるのを少し自重しているのよ」

「ではリアナさんは……………」

「そう、みんなに完全に心を開いたことになるね」

セシリアや春陽達はそのことを聞いて少し嬉しそうな表情になる。

「リアナも甘えてることですし、私も存分に甘えさせてもらおうかな」

そう言つてアスカは春陽達を押しつけて、秋夜の首に両腕を絡ませ耳元まで口を近づけてそつと呟いた。

「今夜はずつと甘えさせてもらおうからね」

「……………あーっ」

この後、秋夜達が何をしていたのかは読者の皆様の想像にお任せします。

余談だが取材にきた二年生の先輩が部員を総動員して秋夜達を探していたそうだ。

第十話（後書き）

カンピオーネ！とハイスクールD×Dがおもしろすぎる。

二次書こうかな？

（・・・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7638s/>

---

I S - 闇夜を翔る黒騎士 -

2011年10月9日00時56分発行